

ゆすはら ゆすはら
高知県梶原町立梶原学園
(梶原小学校、梶原中学校)

1 地区概要
<ul style="list-style-type: none"> ・梶原町は、人口約 3700 人余り(H27) ・標高 410m の山あいの町で、町面積の 9.1% が山林である。 ・小中学校は梶原学園 1 校である。高校は、県立梶原高等学校が 1 校ある。
2 小中一貫教育導入の経緯
<ul style="list-style-type: none"> ・梶原中学校は、平成 9 年に県教育委員会から「中高連携推進事業」の指定を受け、平成 13 年に「中高連携教育開発校」の指定を受ける。 ・平成 22 年に梶原中学校の敷地内に梶原小学校新築校舎完成。梶原中学校大規模改修工事が完成。越知面小学校、四万川小学校が梶原小学校に統合。
3 小中一貫教育の実施形態
<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の学級数は 9(うち特支 3)、児童数は 140 名。中学校の学級数は 5(うち特支 2)生徒数は 80 名である。 ・施設を一体的に利用しながら小中一貫教育に取り組んでいる。 ・校舎は小学校棟と中学校棟が広い渡り廊下でつながり、学年区分に合わせた教室配置となっている。 ・学校統廃合に伴い通学が困難となった生徒のために寄宿舎「梶の木寮」を敷地内に設置している。
4 教育課程の編成と運営
<ul style="list-style-type: none"> ・義務教育 9 年間で基礎学力の確実な定着、脳や体の成長に合わせた指導が小中一貫教育であり、これにより少子化問題を解消し、異年齢活動による豊かな人間関係づくり、コミュニケーション能力の向上も期待できる。 ・小中の 9 年間で前期 1～4 年生、中期 5～7 年生、後期 8・9 年生の 3 期に学年区分。 ・中期と後期の学年は、制服を着用させるなど、上級学年の自覚を育てるとともに、中学校へのスムーズな移行を行い、いわゆる「中 1 ギャップ」の解消を目指している。 ・緩やかな教科担任制の導入。平成 26 年度は 3・4 年(理科・算数)、5 年(算数・国語)、6 年(家庭科)で実施。中学校教科担任者による乗り入れ授業を 5 年(家庭科・音楽)、6 年(算数・音楽・体育)で実施。 ・児童会・生徒会の自主的な運営による毎月第 1 月曜日の小中合同集会、縦割り班掃除、様々な合同の学校行事の実施棟、異学年交流活動を実施。
5 学校と地域の連携
<ul style="list-style-type: none"> ・文部科学省による補助授業である学校支援地域本部事業を活用し、地域住民等が学校支援のボランティア活動を行う「学校応援団」を設置し、活動に関する学校と地域間の連絡調整役であるコーディネーターを校内に配置している。
6 小中一貫教育の成果
<ul style="list-style-type: none"> ・一部教科担任制や異年齢交流への積極的な取組の結果として、制度導入の大きな目的の一つだった「中一ギャップ」が解消されたことは明確である。 ・教職員間で 9 年間を見通した指導方法が必要だとの共通理解が図られつつある。こうした意識改革の成果もあってか、個々の教員が自己の資質・指導力の向上を目指し、全校体制の中で日常的・組織的に継続した実践研究を行うようになった。 ・学習規律確立に向けた取組を全教職員で実践し、児童生徒にも反映されてきている。
7 小中一貫教育の課題
<ul style="list-style-type: none"> ・小中で系統的な指導を徹底し、発達段階に応じた指導の強化が、いまだ十分ではないこと。 ・人事異動。試行錯誤や研修を重ね、ようやく戦力として期待できる頃に異動は厳しい。 ・保護者や地域住民は学校に対し協力的であるが、学力向上やそのために必要な家庭での取組等については必ずしも十分に理解されておらず、協力も限定的であること。
8 小中一貫教育の特色
<ul style="list-style-type: none"> ・昭和 50 年代後半から学校統廃合を繰り返した末に、小中施設一体型の校舎に生徒の寄宿舎までも整備し、小中一貫教育という形を取り町内唯一の学校として誕生したことが最大の特色。 ・町内唯一の学校に対し地域が期待する「基礎学力の定着と学力向上」を目指し、全校一体で多様な取組をしており、それを町教委が厳しい財政事情の中で過大とも思えるほどの支援をしている。

(参考文献「初等中等教育の学校体系に関する研究報告書 2 小中一貫教育の成果と課題に関する調査研究(平成 27 年 8 月)国立教育政策研究所」)